八障連通信

Hasshoren Tsushin

Vol.283

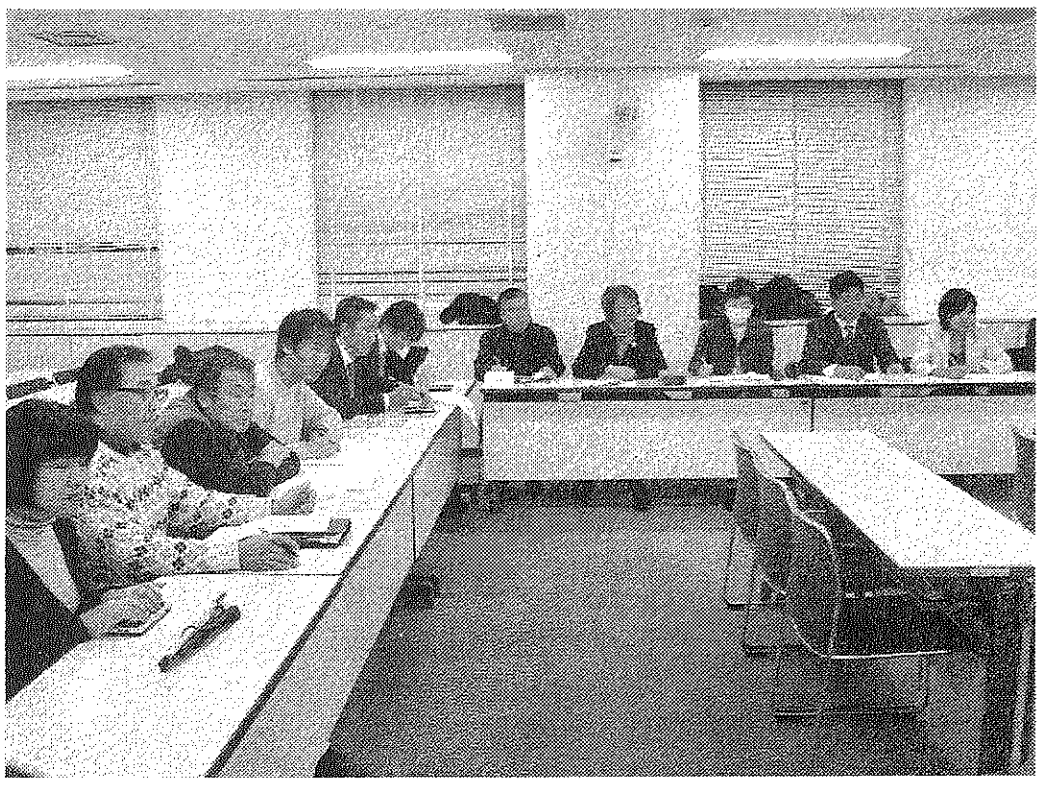
2013.12.8

Tel 080-3451-8400　E-mil hasshoren8.zim@softbank.ne.jp

例会の報告

11月21日、クリエイトホール第2学習室にて、市議との懇談会が行われた。市議会議員9名、八障連関係者21名が参加され、例年より参加人数は少なかったが、意見交換という面では、内容の濃い情報交換の場となった。

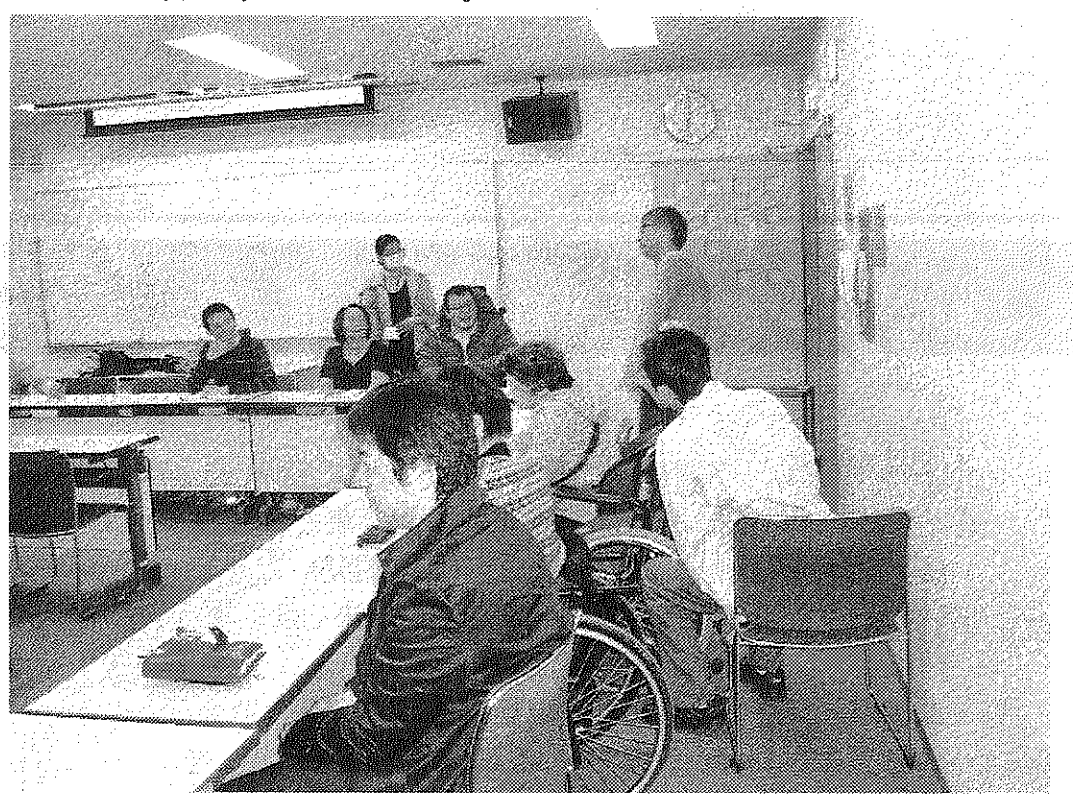
今回の方向性としては事前に市議会議員の方々へ、福祉分野で関心のある事柄について聞き取り調査を行い、一つのテーマに絞らないフリートーク形式で懇談会を進行する予定であったが、当日、初めに取り上げた「当事者への就労支援のあり方と現状」の議題には、障害を抱えながらの生き方や人生論など、様々な“生きることの本質”へ繋がる深い問題と関連する内容であった為、話し合いは拡がりをみせ、結果、殆どの時間を要してしまった。



事前の聞き取り調査では、

① 差別禁止条例制定１年を経ての進捗状況
② 当事者への就労支援のあり方と現状
③ 当事者･家族の高齢化、自立生活を続ける上での老後の問題
④ 防災の問題
⑤ 対市予算要望の中から市議会で扱って欲しい課題
⑥ 移動支援の実態

などの内容が挙げられていた。



今回の聞き取り調査は、市議議員の中には障害者の抱えている様々な問題に対して、多くの関心と強い問題意識を持ちながら、八障連の開催する懇談会に参加されている方がいらっしゃる事が再確認でき、今後の懇談会のあり方を考える上で、とても良い判断材料となった。

毎年、懇談会のなかで取り上げる多くの問題や課題は、短時間で解決できないものが大半を占め、情報共有の時点で会が終了してしまう傾向が強い。その為、懇談会の必要性について議論する事も多く、今後の方向性を模索している面も大きい。

しかし、今回の様子から、解決策も見出す事が難しくとも、各障害者団体が取り上げる問題と、議員の方が知り得たいと思う情報、互いのニーズが少しでも重なり合うものを見つけ出し、相互に協力し合える顔の見える関係作りを目的に、今後も継続してゆく必要性があるのではないかと印象付けられる会となった。

尚、懇談会の内容については別紙記録をご覧下さい。

（文責：川出）

会費に関するお知らせ

ゆうちょへの入金が出来ない状態が長く続いておりましたが、現在、事務手続きも終わり、送金が可能となっております。
誠に勝手ながら、会費金額も変更されている団体もある事から、早めの入金をお願い致します。

今後のスケジュール

12月 19日（木）	例会	18時～20時	クリエイトホール　第２学習室
1 月 16日（木）	例会	18時～20時	クリエイトホール（予定）
2 月 20日（火）	例会	18時～20時	クリエイトホール（予定）

四方山話　今昔と想うこと・・・

随分と久方ぶりの四方山話です。というか、実は予定していた原稿がタイムアウトになり、慌ててその穴埋めに書いています。年の瀬に来てこれか・・・、という感じですね。

さて、今年も早いもので、その年の瀬となってしまいました。ここに来て近年では珍しく、まったくの初顔の新規登録団体がありました。久保山と宇津木にグループホームを2カ所運営している「NPO たまりばあ」という団体で、登録上は「たまりばあ寮」となります。先日 11 月 14 日の運営委員会に代表者（理事長）の鈴木陽一さんが来られて、入会希望の旨をお話しされて、その場で特に問題なく承認されました。

「たまりばあ」という、古い世代の障害者運動を知る者にとっては一種懐かしい響きのある団体名に、どういう団体かと想いを巡らせていましたが、代表者の鈴木さんは本人曰く“大学時代に青い芝の運動に関わっていた”そうで、ここ最近は死語になりつつある“共同作業所の原点＝たまり場づくり”、その発想が理解できる世代の方でした。

ただ、残念ながら『青い芝の会』の運動を知る者が、既に八障連の中でも少数派になっていて、その場でも7割の出席者には理解不明の様子でした。極ざっくりと紹介すると、1960 年代後半から 70 年代の学生運動が華やかし頃、脳性まひの人たちが初めた当事者運動の団体で、当時の学生運動とも連動連鎖し、『川崎バスジャック事件』等のかなり過激な行動も記録には残っています。一方で、まだ“障害者は施設が当然”の時代ですから、彼らの運動を日本の当事者運動の魁けとし、“彼らの存在なくば今日の日本のバリアフリーや自立支援の形は無かった”とまで言う人もいます。

青い芝の会については、またいずれ何かの機会にとして、「たまりばあ」さんの紹介に戻りますが、グループホームを始めて4年目で、今後はリサイクルを中心とした「作業所作り」を模索しているそうです。今後、何かの機会に会員の皆さんとも顔を合わせることもあると思います。いろいろと相談に乗って頂けると助かります。

この「たまりばあ」さんもそうですが、今年の段階で八王子市内にはグループホーム・ケアホームが 70 カ所から 80 カ所あり、八障連に加盟している所は極僅かで、何処のどういった法人が運営しているかさえ解らない所も多くなっています。そんな状況を踏まえ、現在「自立支援協議会」でも、“グループホーム・ケアホームを重い障害のある人たちの生活の場としていくためには何が必要かを考えるため”、その実態調査を行っています。どういった結果が出るかは年明けの春頃になりそうです。

国の政策転換の元「施設よりは安上がり」としてグルホ・ケアホの建設が薦められ、八王子市もその時流に乗ってどんどんその数が増えていますが、それぞれの現場を覗き見ると、少ない予算と人手で自転車操業となっている所が殆どで、当事者や家族の望む“安住の地”とは成り得ていない現実も見え隠れしています。

“地域で暮らす”とは、“地域で生きていく”とは、どういう事なのか？　八障連としては今後何が出来るのか？　何をしていくべきか？　改めて考え直さなければならない時期に来ているのかも知れません。

そんなことを想う年の瀬となりました。

＜文責／夛田＞

連載コラム　『日々のなかから、、、』　vol.26　　事務局長　杉浦　貢

国際身体障がい者スポーツ大会への発展

当初は車いす使用者だけで行われていた国際大会でしたが、1976 年のモントリオールオリンピック開催年に行われたトロント大会は、はじめて国際ストーク・マンデビル競技連盟（ISMGF）と国際身体障害者スポーツ機構（ISOD）の共催で行われ、脊髄損傷者に加え視覚障がい者と切断の選手が出場するようになり、大会名は「1976 Olympiad for the Physically Disabled」、愛称「Torontolympiad（トロントリンピアード）」と呼ばれました。

また同年、ISOD が中心となり切断者による冬季大会がスウェーデンのエンシェルツヴィークで開催されました（IPC 設立後、第1回冬季パラリンピックと位置づけられた）。

1980 年3月、グットマン卿が逝去（享年 80 歳）。この年、視覚障がい者の国際的なスポーツ団体である国際視覚障害者スポーツ協会（IBSA）が設立されました。大会は、モスクワオリンピックの開催年であったが、西側諸国のボイコットの影響もありオランダのアー　ネム（アルヘルム）で開催された。大会名は「Olympics for the Disabled 1980」とされ、脳性麻痺選手の出場も認められました。

同年2月、ISOD により、ノルウェーのヤイロにおいて第2回冬季大会が実施されました。

1984 年3月、冬季大会がインスブルックで開催され、19 か国から 700 名の選手が出場した。

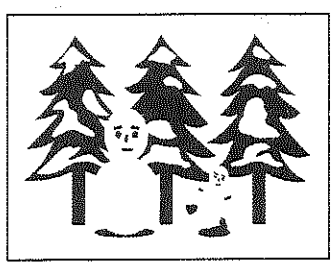
またこの年は、ロサンゼルスオリンピックの開催年でもあった。

当初夏季大会の会場は、車いす競技をイリノイ州で、その他の身体障がい者競技をニューヨーク（この大会からその他の身体障がい者（Les Auras）も参加できるようになった）で行う予定であった。しかしイリノイ州が、財政難を理由に大会4か月前に急遽キャンセルしてきました。

このため、ISMGF が車椅子競技を引き受け、英国のストーク・マンデビル病院で実施することになりました（この車椅子競技大会は、IOC の承認を得てパラリンピックと名乗っている）。

当時の正式名称「The International Games for the Disabled」。

≪編集後記≫



2013 年も残りわずかとなりました。皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本年も格別のご愛顧を賜り、まことに有難く厚く御礼申し上げます。来年も、より一層のご支援を賜りますよう、運営委員一同心よりお願い申し上げます。